しまなみ農業だより

野山に潜む、吸血性のダニ「マダニ」について

先月予告しました通り、今月号の話題はマダニです。今年２月になって急にマスコミに登場するようになり、もらった病気で死亡例が次々と報道され、西日本の人々に恐怖を与えています。

実は生名では以前から、夏季野菜畑で除草中に吸血されたという話を伺っておりまして、平成21年７月の農業講座で話題にさせていただきました。そうしますとある方がわざわざ現物を持ってきてくれました。今回写真で紹介しているのがそれです。すでに死んで乾燥したものですが、体長２㎜程度です。同時期に弓削のみかん学級でも紹介してみましたが、反応が今一つだった記憶があり、当時はあまりかまれた経験がないのだと感じました。生名で以前からみられる原因として、野犬が多いことが考えられます。生名の野犬は人の住環境と近いところで暮らしているので、ダニを散布する機会も多いのだと思われます。しかしながら最近弓削・岩城でもイノシシが増え、里へ下りてくる機会も多くなっているため、これらの地域でもマダニ類の増加が懸念されます。

形状と生態

日本で吸血するマダニ類は数種、体長は２～３㎜ですが吸血すると体重がオスで数倍、メスでは数百倍になり、小豆ほどの大きさにまで膨らむものもいます。基本的には山野で生活し、草の上から通りかかる哺乳類に飛び降りるなどして吸血します。吸血中は口器を表皮深く差し込み、吸血が終わるまで１～２週間離れないようです。ダニは満腹しますと自然に脱落し、空腹になるとまた草に上って次の獲物を待ち受けます。

吸血されたときの対処法

吸血中のマダニを無理に引き抜こうとすると出血が続いたり、口器が体内に残りしこりを感じたりする場合があります。傷口から２次感染の恐れもありますが、厄介なのは取るときにダニをつぶしてしまってダニの内容物が体内に逆流することがあり、わざわざ病気を摂取しているようなものですから、素人判断で取るよりも、皮膚科で取ってもらったほうがよいでしょう。自分で取るくらいなら吸血終了して自然脱落を待ったほうが良い、とする研究者もいます。

日本紅斑熱に注意

マダニ類は吸血中かゆみや痛みを抑える物質を出すものがおり、カ類に比べあまりかゆくないようです。そのため吸血されていることにしばらく気がつかないこともあるようです。ただし、発熱・発疹する「日本紅斑熱」を媒介する場合があります。症状は刺されて２～８日後に頭痛・発熱・倦怠感・関節痛・筋肉痛などが起こり、発熱と同時、または発熱前に紅色の斑丘疹が発生します。病原体は日本紅斑熱リケッチアです。テトラサイクリン系抗生剤（ビブラマイシン・ミノマイシンなど）がよく効くようですが、初期症状がインフルエンザに似ているため、インフルエンザと診断されるとこれらの剤が処方されることがないので、マダニ類に刺されたあと発熱・発疹が見られるような場合は病院へ行き、できれば刺された虫を持っていくのが良いようです。また、今回話題になっている重症熱性血小板減少症候群（ＳＦＴＳ）についてはまだよくわかっていません。今後の研究が待たれるところですが、最近の報道で死者が多いのは、ダニにかまれて死亡した人が続いているのではなく、死亡してサンプルが残っている人のサンプルを再検査したところ、ダニ由来の新型感染症が複数見つかった、ということなので、急に恐れることはありません。要は体調不良を感じたら、早めに病院へ行きましょう、ということです。

▲生名で捕獲されたマダニ類（2009年８月）

◆次号について◆

さて、これまでご愛読ありがとうございました。来月号からは新人さんの登場となります。乞う御期待。